

国際文化論とは何か

— 定義化への試み —

神 徳 昭 甫

I 文化・文明について

初めに

国際文化論，あるいは国際文化学とは何かを考える前に，まず文化・文明とは何かについて考えてみたいと思います。皆さんが所属するこの人文学部は三つの学科，つまり人文学科，国際文化学科，言語文化学科から成り立っています。人文学科を除く二つの学科が，〇〇文化というふうに，文化という語を学科名の中に含む名称を名乗っていることは決して偶然ではないでしょう。人文学部を英語で表記すれば，Faculty of Humanities ということになりますが，この humanities すなわち人文学，あるいは人文科学というのは，自然を解明する学問である自然科学 natural science や，社会についての学問である社会科学 social science (studies) と区別される，人間性について学ぶ学問であると同時に，およそ人間に関する諸学を扱うものであり，ふつう，語学・文学・歴史・数学・哲学・心理学などがそれに該当します。

この学問は現在では理学部で学ぶことが多いのですが，これらはすべて人間のみが築き上げ，人間のみが学び，また伝えることのできる，いわゆる「文化」であることが分かります。こうしてみると，人文学部というのは広い意味で「文化」を学んだり，「文化」について研究する学部であると言い換えても 差し支えないと思います。

文化・文明とは何か

さて先ほど文化とは人間のみが作り上げたものであると述べましたが，このように文化とは，まず自然，動・植物とは区別される人工物，あるいは人工的な事物であるということが出来ます。従って道具や機械，各種の建築物，芸術作品のように目に見え触って確かめることのできるものから，言語，科学，学問，さらには社会とか，社会の様々な組織や制度のように本来，直接手に取ったりできないもの，また目に見えない風俗・習慣のようなものもこれに含まれるわけです。ところでこうした文化・文明とは何かを直接扱う分野があります。これは主に文化人類学という20世紀にアメリカで発達した学問ですが，その文化人類学者，クローバー(A.L. Kroeber, 1876~1960) とクラックホーン(C. Kluckhohn, 1905~60) によれば文化・文明とは何か，つまり文化・文明の定義について述べたものは，これまで160以上(英語の文献のみで151) あるということです(『文化—概念と定義の批判的考察』 *Culture, A Critical Review*

of Concepts and Definition, Cambridge, Mass., 1952)。そのすべてについてここで触れることは勿論出来ませんが、おおよその見当をつけてもらうために主要なものの幾つかに当たっておきたいと思います。

まず、文化・文明とは何かについて最も早く述べられ、また、今なお最も多く引き合いに出されるのが、イギリスの人類学者タイラー (E.B. Tylor, 1832~1917) が『原始文化』(*Primitive Culture*, 1871) の中で述べている次の定義です。

文化あるいは文明とは、知識・信仰・芸術・法律・習俗・その他、人間が社会の一員として獲得した能力と習性とを含む複合の全体である。(タイラー1)

これは今日古典的ともいわれる有名な言葉ですが、これをもっと分かりやすくまた現代的に修正すると、文化とは「人間が社会生活をつうじて学習し、伝達される行為や生活」(村川 9) となるでしょう。要するにある集団が行動の基準にし規範とする「生活様式」(a way of life) のことですが、しかしながら、たとえ同じように世代から世代へ伝えられるものであっても、「生物学的な遺伝」(人間のなかの「自然」) のようなものは、該当しないということを改めて確認しておきたいと思います。つぎに注目すべきは、タイラーは、ここで文化と文明を区別して述べてはいないことです。つまり、彼にとってはこの二つは同義語であり、両者の間に区別は存在しなかったことになるのですが、この点についてはどう考えるべきでしょうか。これに関しては今も学者、専門家の間で意見は分かれているのですが、そのことを論じる前に、ここで一度文化・文明という言葉がいつから使われるようになったのかを、歴史的に振り返ってみたいと思います。

「文明・文化」の歴史

日本史の年表を手繰ると「文化」、「文明」という年号がそれぞれ一度ずつ採用されており(前者は江戸時代、後者は室町時代)ますが、これはともに中国の古典の題名より取られたもので、どちらも現在我々が使っているような「意味」で使われたわけではありません(上山 26-27)。ほぼ現在のような意味で「文化」、「文明」という言葉が日本で使われ始めたのは『国語大辞典』(小学館)によれば、「明治時代 civilization の訳語として使用されたところで、どちらもほぼ同じ意味であった」(北原他1111) のですが、「『文明』が『文明開化』という成語の流行とともに明治初期から一般的に使われていたのに対して、『文化』が定着したのは明治二十年前後であ」(同上) ったようです。

しかし「文化」という語は、明治三(1871)年の末頃、ほぼ同時期に中村正直(1832~91)と西周(1829~97)によって使われたのが最初らしく、以下の用例が『国語大辞典』に記載されています。

「次第に工夫を積めるもの、合湊して盛大の文化を開けるなり」(北原他1111, スマイルズ63)¹⁾

「其国々の経界及び政体を論し、其他風俗、人種、教法、文化、人口、<中略>財政等の如きを悉く論し」(北原他1111, 西²⁾)²⁾

一方「文明」の初出は、福沢諭吉の『西洋事情』(慶応2=1866)の中とされています。

洋籍の我邦に舶来するや日既に久し。その翻譯を經るもの亦尠なからず。然して窮理、地理、兵法、航海術等の諸学、日に闢け月に明にして、我が文明の治を助け、武備の關を補ふもの、その益豈亦大ならずや(福沢¹ 285)

さらに福沢は『文明論の概略』(明治8年=1875)の中で、「文明とは英語にてシウキリゼイションという。すなわち羅甸語のシウキタスより来たりしものにて、国という義なり。故に文明とは、人間交際の次第に改まりて良き方に赴く有り様を形容したる語にて、野蛮無法の独立に反し、一国の体裁を成すという義なり」(福沢² 57)と述べています。

このように civilization と culture というふたつの語のうちでは前者の方が早く、既に幕末に伝わっていたわけですが、後者はそれよりはるかに遅く「明治三十年代(1897~1906)後半、ドイツ哲学が浸透し始めたころで、それに伴い『文化』という語が、ドイツ語の Kultur (英語の culture) の訳語へと転用された」(北原他1111)というのが、どうやらその実情³⁾のようです。

1) 中村正直訳『西国立志編』(1872)の原著を参照すると、中村が「文化」と訳した語はやはり *civilization* となっている (“Laborious and patient men of all ranks—cultivators of the soil and explorers of the mine—inventors and discoverers—tradesmen, mechanics, and laborers—poets, thinkers, and politicians—all have worked together, one generation carrying forward the labours of another, building up the character of the country, and establishing its prosperity on solid foundations. This succession of noble workers—the artisans of *civilization*—has created order out of chaos, in industry, science, and art...”(Samuel Smiles, *Self-help, with illustrations of character and conduct*, London:J. Murray, 1859).

2) ただし西周「百学連環」『西周全集第四卷』を捜してもこれに相当する箇所は見当たらないので、次の用例を挙げておく。「眞の學術に至りては、文化の資けなかるへからず」(西247)。

3) 以上を要約すると、「文化」という言葉は、「文明」と同じく、文明開化期の明治三年末に *civilization* の訳語として初めて使用され、それが定着したのが明治二十年前後であり、さらに三十年代ドイツ語 Kultur の訳語に転用されたわけである。これによって次第に「文化」と「文明」の違いが強調されるようになり、大正時代になると、「文化」が多用され「文明」の意味をも包摂するようになった(北原1111)。

それでは、これら「文明」、「文化」の原語である civilization および culture はどのように使われてきたのでしょうか。それにはこれらの言葉の背景にある西洋近代の歴史を眺めてみる必要があると思います。

(1) フランス

まず、「文明」(英語 civilization, 仏語 civilisation) の元になる civil という言葉は、ラテン語の *civis*, *civitas* から派生した語で、「市民」、「都市」という意味であるから、civilization とは、「市民化する」、「都市化する」ということになる(村上 75)。つまり人間が「自然や野蛮、未開の状態から進化・発達し到達した高度な段階」を表していることは明らかです。この語が出来たのは、18世紀のフランスにおいてだったといえます。ルイ14世(Louis XIV rf. 1643-1715)の治世にフランス文化は、ヨーロッパの中心になっていましたが、18世紀になると、退廃した絶対王制のもとで市民階級の自由を求める動きが強くなり、モンテスキュー(Montesquieu, 1689-1755)やヴォルテール(Voltaire, 1694-1778)、ルソー(Rousseau, 1712-78)などが出て啓蒙主義運動が始まります。これは「人間の理性を絶対に信頼し、この理性を曇らすいっさいの迷信や偏見を打破しよう」とする活動です。そのあと、ディドロ(Diderot, 1713-84)、ダランベール(D'Alembert, 1717-83)らの百科全書派がこれに続き、彼らの主張した思想が、自由・平等・博愛を旗印とする、あのフランス革命の指導精神となったわけです。この18世紀フランスの「政治的、宗教的、知的、道徳的にもその進歩が不断に進歩しつつある状態を一語で表す言葉が探し求められ、『文明』(civilisation)が発見された」(平井5)というのです。いまでも我々は「舶来のブランド商品」というと、何となく「フランス製」であるかのような錯覚を起こしがちですが、このように「自律、解放、人間社会の不断の向上という意味での進歩」を謳う啓蒙主義は、「西洋文明」の源である、あの「ギリシャ・ローマを引き継ぎ、更にそれを凌ぐのはフランスである」と言ったルイ14世以来のフランス人のナショナリズムとも結びついて、「文明」(civilisation)という概念は「全人類を包括するユニヴァーサルなイデー」(平井 6)にまでなったのです。

このように「文明」という語に特別の意味を賦与したフランスですが、これに反して「文化」(culture)という語は、彼らフランス人にとって「何ら特別な感情を内包していない客観的な価値概念だった」(平井 5)ようで、18世紀の末に、後に述べるドイツからの影響で、わずかにインテリのサークルで根を下ろしたに留まり、「農耕」という、もともとの意味が精神的なものに転じた「精神の陶冶」(culture de l'esprit)、「教育」、「形成」という意味が確立した(平井 5)に過ぎなかったのです。

(2) イギリス

英仏海峡を挟んで大陸のフランスと向き合うイギリスにおいても事情は、ほぼ同じであったといえるでしょう。「清教徒革命」、「名誉革命」、「産業革命」という歴史的な「偉業」を

成し遂げ、既に18世紀に市民階級の台頭とロック（John Locke, 1632-1704）ら啓蒙主義者を輩出したイギリスの社会は自らを「当時の世界における最高水準を自負し」て「政治的ならびに経済的な達成をはじめとして、学問や芸術をもひっくるめて『文明』とよんだ」（上山 29）のです。

(3) ドイツ

しかしながら、これらの両国に比べ政治的、経済的にはるかに後進国であったドイツでは大いに事情は異なっています。宗教改革では時代に先駆けたものの、皇帝権が弱く諸侯の分立状態が長く続いたため他のヨーロッパ諸国のように強大な統一国家が出来上がったのは、漸く1740年即位したプロイセンのフリードリヒ2世（Friedrich II, rf. 1740-86）の時代になってからでした。この間の事情を上山春平は次のように説明しています。

18世紀のドイツといえば、哲学ではカント⁴⁾やヘーゲル⁵⁾、文学ではゲーテ⁶⁾やシラー⁷⁾、音楽ではモーツアルト⁸⁾やベートーベン⁹⁾の活躍した時代であった。つまり、学問や芸術等の精神的活動の面では、ドイツがヨーロッパの中で最高の水準を示していたのである（上山29）。

しかし、政治的には、ルイ14世の華麗な治世につづいて大革命をなしとげたフランスにおくれをとっていたし、経済的には産業革命の口火を切ったイギリスに及ばなかった。そこでイギリス人やフランス人たちが、当時の世界における最高水準を自負する彼らの政治的ならびに経済的な達成をはじめとして、学問や芸術等をもひっくるめて「文明」（civilization, civilisation）とよんだのにたいして、ドイツ人は、みずからの誇りとする学問、芸術等の精神的活動とその所産を「文化」（Kultur）とよんで「文明」と区別したのである（上山29）。

従ってドイツ人にとって「文化」とは「学問、芸術、宗教などの高度な精神的活動とその所産を意味」し、「文明」の方は、主として生活の物質的・条件的改善にかかわる活動やその所産を意味する、という使い分けがなされていた（上山 28）わけです。

私が高校時代、今から40年以上も前になりますが、学校では、毎年一度「文化講演会」

4) Kant, Immanuel (1724~1804)

5) Hegel, Georg Wilhelm Reidrich (1770~1831)

6) Goethe, Johann Wolfgang von (1749~1832)

7) Schiller, (Johann Christoph) Friedrich (von) (1759~1805)

8) Mozart, Wolfgan Amadeus (1756~91)

9) Beethoven, Ludwig van (1770~1827)

というのがあり、大学の先生がきて話をするならわしになっていました。三年のときの講演の題目が、この「文化と文明」でした。そのときの山口大学の哲学の教授は、その結論として「文明とは、電気洗濯機のような目に見えるもの、文化とは、その電気洗濯機を作り上げる理論のようなものである」と述べていたことを覚えています。当時60才前後の年齢に達していたと思われる、その先生は、おそらく旧制の高校や大学で青春時代を過ごし、こうしたドイツ風の考えや教養を身につけて育ったのだな、と今になって思い当たるのです。

(4) アメリカ

文化と文明の定義をめぐって、英仏とドイツでは、それぞれ異なる考え方をしていることがわかりましたが、これら二つの考えを統一、もしくは折衷したのが20世紀のアメリカ、およびイギリスの人類学者です。

20世紀のアメリカでは自国の先住民（アメリカ・インディアン）統治のため、その研究が進み、いわゆる「文化人類学」が誕生しました。彼らは、「発達のおくれた未開社会における人間の活動とその所産を、すべてひっくるめて『文化』とよんではどうか」（上山 32）と考え、更に文化を「ある人間集団の生活様式」と規定することを提案したわけです。現代では、この考えが一般的になっているわけですが、こうなると文化は精神的であるか、あるいは物質的であるかは問題ではなくなり、そのどちらも含まれることとなります。さらにボアズ（Franz Boas, 1858～1942）やその弟子のR. ベネデクト（Ruth Benedict, 1887～1948）、さらに前述したクローバーやクラックホーンらの文化人類学者は、「自分自身のもつ文化を最高であると考え」《自民族中心主義》（ethnocentrism）^{10）}を排し「すべての文化がそれなりの価値を内在している」とする《文化相対主義》（cultural relativism）^{11）}を打ち出したのです。

文化相対主義

しかし人間はどうしても自文化という「色めがね」をかけて他文化を見る傾向があるもので、クラックホーンは次のような先住民ナバホ族の子供と白人の女教師の例を挙げて、文化相対主義の実践がいかにむづかしいものであるかを示しています。

10) 「自文化中心主義ともいう。自分の所属する集団の文化に基礎をもつ価値ないし価値観を絶対視し、それを基準にして文化的背景の異なる人々の行為や存在様式について価値判断を下そうとする態度ないし見方をいう。文化相対主義と対立する概念」（石川他336-337）

11) 「いかなる風習も、それらを一部として包摂する文化全体という観点から把握されなければならないとする文化人類学者の態度ないし研究方法をいう。文化相対主義は、自分自身のもつ文化を最高と考える態度を意味する自民族中心主義と対立する概念で、諸文化を自文化を基準にして優劣の視角から捉える自民族中心主義を極力排除し、どの文化もそれぞれ所与の環境への最適の適応方法として歴史的に形成されたものであり、すべての文化がそれなりの価値を内在しているという捉え方をする」（石川他671-672）

シカゴの公立学校で長年教鞭をとり、高い知性と輝かしい経歴を兼ね備えたある女教師が、インディアンの学校の先生に転出した。一年ほど経ってから彼女にナバホ・インディアンの子供の知能がシカゴの子供と比べてどうかと尋ねると、こう答えた。「さあ、それが何と申しあげたらよいか分からないんです。白人の生徒に負けないくらい利口だと思える時もありますし、逆にほんとに間抜けみたいに振る舞う時もあるんです。こないだの晩なんか、ハイスクールでダンス・パーティがあった時のことですけど、英語の時間で一番できる生徒の一人がポツンと立っているのを見つけたんです。それでその子を可愛い女生徒のところへ連れて行って踊りなさいって言ってあげたんですけど、二人とも俯いたまま動こうとしないんですよ。口を利こうともしないんです」。そこでその若い二人が同じ氏族（クラン）の人間かどうか、先生をご存知だったのですか、と聞くと、「そんなこと、どうだってよろしいじゃございません」。そこで「先生がご自分のお兄さんと同じベッドで寝るのはどうですか」と聞くと、彼女はむっとして行ってしまった（クラックホーン25）。

つまりこの先生は、ナバホ族にとっては、たとえ親族関係はなくとも同一の氏族に属する男女がダンスで身体を触れ合うことは、インセスト（近親相姦）と同じ意味をもつことを「理解できなかった」のです。

自文化中心主義

多くの民族、国家が直接、間接を問わず、影響し合う現代の国際社会においては、自文化中心主義（自民族中心主義）というものは、「できるだけ排除する」必要があることは確かですが、ただ人間というものは（個人と同じく、その集団である民族、国家においても）、もともと「自分中心に」物を見たり考えたりするものなので、これを完全になくすることはおそらく不可能といってもよいでしょう。次の引用文はその辺の事情を一層明らかにしています。

司馬—私は—これは今年になって知った言葉なのですけれども—「エスノセントリズム（ethnocentrism, 自民族中心主義）」という言葉が教えられた。

エスニック（ethnic）というか、われわれ人間は、いろいろな民族にわかれている。それはどの民族も、自分の民族がいちばんで、自分の民族の文化がいちばんだと思っているわけです。それは先住民のエスキモー（イヌイット）もそう思っている。

言語学者の服部四郎さん（1908～95）のように、モンゴル語とか、アイヌ語とか、トゥングースの言葉とか、アルタイ諸言語を研究された人が、どうして彼らはここで誇り高く暮らしているのかというのは—言語学者としてはべつに不必要な疑問なのですが—やはり疑問だったのでしょね。

山折—面白い疑問ですね。

司馬—それで「エスキモーといえども」、その誇りがある。

アメリカの人類学者によれば、「エスキモーといえども」というのはエスキモーが低いというのではむしろない。あんな極北に暮らして、寒いところで寒さを防ぐいろいろな装置をもっている。そういう文化をもっていて、そしてここが世界の中心だと思っている。

ひとびとには、民族それぞれのディグニティ (dignity)、威厳があるのです。

…………… (中略) ……………

山折—いまおっしゃったように、どんな民族でも文化的に考えれば自分が中心であるという、そういう世界観をもっているはずなのですね。そういうものをもっていないと、誇りをもって生きていけないということだと思いますね。

そういう点では、エスノセントリックなものの考え方というのは、必ずしも悪い面ばかりではなくて、むしろ当然だともいえるわけです。おっしゃるようにもう本能に近いようなものだろうと思います。

ただ、そういう同じような主張をもつさまざまな民族集団と、ソフトにつき合い、ゆるやかに共存できるような、その程度のエスノセントリズムといえますか、自己中心主義みたいところで止めておかなければいけないわけですね。(司馬・山折114-117)

もし全人類が本当にこの考えを理解できれば、言い換えれば、自民族のみならず他民族も、否、「あらゆる民族、およびその文化はそれぞれが絶対の価値を有している」ということが熟知できれば、それがすなわち「文化相対主義」の考え方に到達したことになるので、世界各地の紛争は収まり、地球上には戦争のない平和な社会が実現するはずなのですが、しかし現在のところ、人種、言語、宗教などの「差異」から生じる「偏見」(自民族中心主義、自文化中心主義)に阻まれ、「文化相対主義」の普遍化は極めてむづかしいことのようにです。

いずれにしても「あらゆる文化間に優劣の差はない」と考える、この《文化相対主義》の考え方を延長すれば「文明」は「ある水準以上に発達をとげた社会における文化」に過ぎず、文化と文明の違いは単に程度の差であり、従って「文明は文化を拡大したもの」(ハンチントン53)となってくるのも自明のことといえるでしょう。

文化・文明の現在

このハンチントンの『文明の衝突』(1998)は、東西冷戦の終結とともに、イデオロギーが終焉し、それに代わる民族主義の台頭が世界各地で紛争の火種となっていることから、冷戦後の国際政治の枠組みを「イスラム・儒教コネクション」対「西欧文明」という図式で捉えたものです。彼は文明を八つに類型化して、西欧文明、儒教文明、日本文明、イスラム文明、ヒ

インドー文明、スラヴ文明、ラテン・アメリカ文明、アフリカ文明とし、この八つの文明の幾つかが衝突するという枠組み（パラダイム）を示し大きな反響を呼びました。例えば山崎正和は、ハンチントンのこの書を「西欧と非西欧の対立を歴史的な流れだと主張して、いたずらにその対立を煽る」ものだと非難していますが、氏によれば、ハンチントンの誤りは「文化と文明を混同したところからくる」とし、次のように述べています。

ハンチントン氏は、しきりに「文明」という言葉を自明の概念のように語るのですが、じつをいうと文化と文明の定義はけっして単純なものではなく、これまで歴史学者や哲学者のあいだで多くの議論が重ねられてきたものです。まずこの点でハンチントン氏ははなはだ素朴であって、文明とは言語や歴史や宗教や生活習慣を基盤として、人間の自己認識が描き出す生活圏の枠組みだと言います。明らかなことは、ここで彼が文明と文化の区別を無視し、文明を単に規模の大きな文化としてしか理解していないことでしょう。じつは、文明と文化は質的に異なるものであり、両者のあいだで人間の関わり方もまったく違っているのに、彼はその違いをたんなる量的な程度の差としか考えていないのです（山崎 215-216）。

山崎は「生活様式には人間にとって意識的な面と無意識な側面があって、この二つは程度差ではなく、質的な違いを持つ」（山崎 216）と主張し、結局文明とは、この「意識的側面」であり、「頭で理解し、主張したりする生活様式」であるのに反し、「人がからだで理解し、暗黙のうちに身につけている生活様式」、すなわち「無意識的な側面」が文化であると述べています。同氏は更に「言語にも歴史にも宗教にも生活習慣にも、それぞれのうちに文化と文明がある」と言い、例えば「われわれの身につについてほとんど反射的に口をついて出てくる言葉は文化」であり「文法として体系化され、政治的に国語として定められた言語は文明」（山崎 216）である、とするのです。

また歴史や道徳・信仰に関しても「伝統として個人の感受性に浸透し、自然に挙措挙動を支配する歴史は文化であり、公式に記述され、そのために国民が団結したり、分裂したりする歴史は、文明に属しています。個人の性癖になった道徳感覚は文化であるのにたいして、法として成文化された規律は文明であり、内面的な信仰が文化であるのに対して、教会のもとに制度化された宗教が文明である」（山崎 216-217）と断定しています。

確かにこれらの意見は、文化・文明の「定義」としては異色のものであり、傾聴に値するものであることは事実です。つまり「意識」と「無意識」の間には明確に差があり、両者は異質であることは確かでしょう。しかしながらいかなる言語活動であれ、実際に我々が言語を使用するときに、「夢遊病」のような場合を除いて、全く「意識」せずに、つまり「無意識」でこれを行うことなどありうるでしょうか。「意識」、「無意識」といってもここでは程度の差に過

ぎないのではないのでしょうか。「歴史」や「法」に関しても同様です。氏のいうところの「無意識」＝「自然」＝「文化」、 「意識」＝「不自然」＝「文明」という図式に従えば、同一文化圏において、「無知」と「知」という「二重構造」が存在することになり、あたかも封建時代の「身分制度」にも似た、固定的な「階層化」を認めなければならず、これは氏にとって「近代の擁護」とは逆方向の、はなはだ不都合な事態といわざるを得ません。

いずれにせよ、「無意識」も「意識」も結局程度の差に過ぎないとすれば、山崎氏の定義もハンチントン説も、テイラーの古典的定義もさしたる違いはない、ことになります。

作家の故司馬遼太郎もまた『アメリカ素描』でこの問題に触れています。

ここで定義を設けておきたい。文明は「たれもが参加できる普遍的なもの・合理的なもの・機能的なもの」をさすのに対し、文化はむしろ不合理なものであり、特定の集団（たとえば民族）においてのみ通用する特殊なもので、他に及ぼしがたい。つまりは普遍的でない。例えば青信号で人や車は進み、赤で停止する。このとりきめは世界に及ぼしうるし、げんに及んでもいる。普遍的という意味で交通信号は文明である。逆に文化とは、日本でいうと、婦人がふすまをあけるとき、両ひざをつき、両手であけるようなものである。立ってあけてもいい、という合理主義はここでは成立しえない。不合理こそ文化の発光物質なのである（司馬¹ 17）

司馬はまた「文明」＝普遍性の例として“ジーパン”，「文化」＝特殊の例として“ターバン”を挙げています。つまり、いまやジーパンは「ソ連の若者でさえこれをはきたがる」カッコイイものだが、一方ターバンは回教徒のみに着用されると言う点で「特殊」で「普遍性」がない、というわけです。この考えによれば、文明と文化は「程度の差」に過ぎず、従って「文明」とは「文化の拡大したもの」というハンチントン説に近くなるといえるでしょう。さらに、どちらも「モノ」でも「コト」でもよい、つまり「精神的なもの」であっても、「物質的なもの」であっても構わない、と言う点において「ドイツ流」の定義を排して、アメリカ式の現代文化人類学の知見により近い立場である、ともいえるでしょう。なお、司馬遼太郎の対談集、『東と西』（1999）には、対談者の開高健による「文明というのはなんであれ、他の文化圏に容易に伝達できるものか、容易でなくても少なくとも伝達が可能であるものを文明という。ジーパンであれ、オートバイであれ、原爆であれ。文化とはなにかという、その文化圏に固有の血と土の産物であって、他の文化圏に伝えることが不可能であるか、もしくは極めて困難なもの」（司馬² 46）という見解も示されていますが、これは司馬氏のものとはほぼ同様の内容である、いってよいでしょう。

「日本文明」はありうるか

文明=普遍・合理，文化=特殊・不合理という司馬説を適用した場合、「日本文明」というのはありうるのでしょうか。言い換えれば、「日本文化」は世界の範となる「普遍性」を獲得しているといえるのでしょうか。ハンチントン「儒教文明」(中国文明)から独立した「日本文明」という類型を想定していますが、前述の村上陽一郎は、「文明」とは「文化の一形態であって、自然と他の諸文化の双方に対して攻撃的になり、自然を人為によって支配し管理すると同時に、周辺の個々の文化を自らの文化の形態によってブル・ドーザのように均して支配する力を持ち、しかもそれを実行するに当たって、様々な技術と社会的な機構や制度(そのなかには、法律、警察、教育なども含まれる)を用意するような文化」(村上 93)であると定義しています。氏によれば、かつての「ギリシャ」や「近代ヨーロッパ」がその典型となるわけですが、それらに比べて、これまで他の文明の受容と摂取に汲々としてきた「日本文化」には、「文明」特有の「普遍化への意志」も、ブルドーザのような「他の文化への攻撃性」も持ち合わせてこなかったために『「日本文明」などという言葉は存在しない』わけです。

よく言われることですが、これから「日本文化」が「日本文明」になるためには、(村上氏はその必要を認めていませんが)自文化の価値を積極的に認めて、さらにそれを世界に向かって「発信」¹²⁾していくだけの「内容」(思想)と「表現力」を持たなければならないでしょう。

II. 国際文化論とは何か

以上、文化もしくは、文明の定義をめぐってその主な意見を見てきました。ここで本題の「国際文化論」について考えてみたいと思います。「国際文化論」もしくは「国際文化学」というのは新しい学問で、これがどういう学問であるのかについて、系統的、本格的に述べた書物は、いまのところまだありません。そこでまずその手がかりとして、国際文化とはどういうものか¹³⁾ということから始めたいと思います。

国際文化とは 国際文化という名称を英語で表記すれば、intercultures となります。従って国際文化論は、intercultural studies となりますが、これは、複数の文化を比較しその異

12) 日本人の海外文化に対する態度—外来の文物の「受容」に始まり、ついで必要なものを「摂取」し日本的なものへと「造り変えていく」というやり方が「国際化時代」における立ち後れ(つまり「文化コミュニケーション」における「一方通行」)を招いた元凶であるという反省から、従来の「受信」型から、主体的な「発信」型への転換を主張する意見が近年特に喧しい。しかしそのためには、いったい「何を発信するのか」「そもそも伝えてゆくべき意見や情報があるのか」という議論がまず必要(稲賀5)となる。このような『「国際化」した社会に向けてとにかく『発信』しなければというあせり』を「発信強迫症」と呼ぶ(稲賀6)こともある。

13) 国際文化学の定義としては次のようなものがある。「国際文化学とは、自文化を相対化して異文化の存在を認めた上で、関係的・構造的・過程的文化観に立ち、諸文化の交差する地点で、文化が新たに異種交配して多面的に展開する諸相を、構造的にとらえるような学際的学問」(島根・寺田39)

同を研究する、比較文化研究 (comparative cultural studies) や、異文化研究 (cross cultural studies) というのと、どう違うのでしょうか。その違いをハッキリさせた学説というのは残念ながらまだありません。むしろこれらの研究分野と重複し共通する性格を多分に有する学問だといってよいと思います。ただ最近注目されている学科として、「総合科目」とか「学際的研究」といわれるものがあることは、皆さんも「教養教育ガイダンス」などでご存知だと思いますが、これは英語では、interdisciplinary subjects といっています。従来のような細分化された、それぞれの専門領域を研究対象に局限するのではなく、自然科学・社会科学・人文科学の三分野に跨がってそれらを横断し、また総合する新しい試みの学問だと言えます。

ところで先ほど国際文化の英訳として intercultures (international cultures ではない) ということを書きましたが、それは、文化というのは必ずしも国家と一対一の関係なのではなく、国家の内部においても複数の文化が存在するからです。たとえば日本という国は、日本人という単一民族から構成された国家である、という考えは一つの「神話」である¹⁴⁾、というような批判が最近よく聞かれますが、日本国内には「アイヌ、在日韓国・朝鮮人、沖縄の人々」などの複数の民族が共存していること、さらにこれらの人々はそれぞれが固有の文化を維持していることは確かな事実です。また日本民族そのものも縄文人と弥生人の混血であるといわれるように、人間が現在のような人間になるまでに、長い進化を通じて人種的な混合、混血を繰り返してきたのが実状であり、純粋な民族というのが果たしてあるのかどうか、はなはだ疑問です。

また文化 (culture) の「下位概念」として「サブカルチャー=下位文化」(sub-culture) と言われるのがあります。これは「地域、年齢 (世代)、性別、職業、階級、身体」などによって人間は「異質の文化」を持つ場合がある、ということです。

次の例は、年末恒例の歌番組をめぐる、父と息子の間の「テレビのチャンネル争い」ですが、「年齢」(世代間) のギャップが表面化したものです。

最近流行の若い歌手が出てきて歌えば、息子は喜んで一緒に口ずさんだりしているのだが、父親の方はおもしろくなさそうな顔をしている。挙げ句の果てには、「チャラチャラしている」だの「何を歌っているかわからん」「こんな奴らを出すな」など不平を言い出したのである。一方、昔はやった演歌歌手などが出てきて歌えば、逆に父親は機嫌になってブラウン管に見入り、息子の方はつまらなさそうにその歌が終わるのをまだかまだかと待ち望んでるようすである。その演歌歌手の出番が終わり、次に登場したのは、息子が大ファンの若い女性歌手だった。息子は待っていましたとばかりに、その歌を楽しんでいると父親はテレビの

14) 例えば網野善彦『日本社会の歴史 (下)』152-156など。

リモコンを取り出し、なんとチャンネルを変えてしまった。もちろん息子は大変怒って父親の行為を責めつけた。そこで口論がはじまり、もうテレビどころではなくなってしまった。まさに流行歌支持派と演歌支持派に息子と父親が分かれ、大ディベートが開始された。……

父親と息子の口論は続き、見かねた母親が出てきて、「あなたたちそれぞれ違う文化をもっているんだから仕方ないでしょう。喧嘩するくらいなら一緒に見るのをやめなさい」と言った。その一言で父親と息子の口論は収まった（黒木 13-14）。

このような世代間のギャップもまた「異文化体験の一つ」であり、このほか「性、地域、職業など」で「何か違いを感じたとき」、それは「自国内の異文化に身を置いたことになる」（黒木 14）のです。

最後にこれまで述べたことを総合し、この国際文化論、国際文化学とは何か、と聞かれれば、「自己相対主義を基盤とした異文化研究であり、現代世界に発生する様々な異文化との接触・交流を通じて絶えず変容していく自文化の様相—文化におけるハイブリッドな（交雜的）現象—ダイナミックを力動的に捉える学際的な学問」と定義したいと思います。

参考文献

1. 和文のもの：

- 網野善彦『日本社会の歴史（上）～（下）』岩波新書，2001年
石川栄吉他編『文化人類学事典』弘文堂，昭和62年
稲賀繁美「異文化とどうつきあっていくか」『異文化への視線』佐々木英昭編 新しい比較文化のために，名古屋大学出版会，1999年
上山春平『受容と創造の軌跡』（日本文明史全七巻，1日本文明史の構想），角川書店，平成2年
クラックホーン，C『人間のための鏡』光延明洋訳，サイマル出版社，1971年
黒木雅子『異文化論への招待』遠いからの自文化再発見，朱鷺書房，1996年
北原保雄他『国語大辞典』第二版，小学館，2001年
島根國士・寺田元一『国際文化学への招待』衝突する文化，共生する文化，新評論，1999年
司馬遼太郎『アメリカ素描』新潮文庫，平成元年
——『東と西』朝日文庫，1999年
司馬遼太郎・山折哲雄『日本とは何かということ—宗教・歴史・文明—』NHK出版，1997年
スマイルズ，サミュエル¹『西国立志編』中村正直訳，講談社学術文庫，昭和56年

—————² 『自助論－人生を最高に生き抜く知恵－』 竹内均訳，三笠書房，
1985年

タイラー，E. B. 『原始文化』 比屋根安定訳，誠信書房，昭和37年

筑島謙三 『文化心理学基礎論』 勁草書房，1980年

西周¹ 「百学連環」 『明治啓蒙思想集』 明治文学全集3，筑摩書房，昭和42年

——² 「百学連環」 『西周全集第四卷』 宗高書房，昭和56年

蓮見重彦・山内昌之 『文明の衝突か，共存か』 東京大学出版会，2000年

S. ハンチントン著・鈴木主税訳 『文明の衝突』 集英社，1998年

平井正 『文化と文明の哲学』 学文社，昭和51年

船曳建夫 「文化と理解」 『異文化への理解』 東京大学公開講座，東京大学出版会，1998年

福沢諭吉¹ 『西洋事情』 福沢諭吉全集第1巻，岩波書店，昭和44年

—————² 『文明論の概略』 岩波文庫，1996年

ベネディクト，R 『文化の型』 米山俊直訳，社会思想社，昭和48年

村上陽一郎 『文明の中の科学』 青土社，1994年

村川堅太郎他 『詳説世界史』 山川出版社，1991年

山崎正和 『近代の擁護』 PHP 研究所，1994年

2. 英文のもの：

Smiles, Samuel. *Self-help, with illustrations of character and conduct*, London:
J. Murray, 1860

「付記」 なお拙論は，富山大学人文学部平成16年前期開講の「国際文化入門(1)」において筆者が担当した第一回イントロダクションの講義録に若干の加筆・修正を施したものである。